

# ミナミトミヨ物語



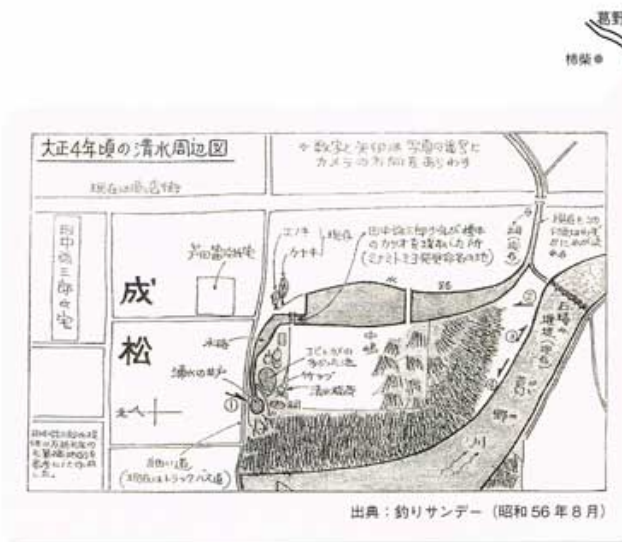
ぼくはミナミトミヨ  
体長3~5cmの小さな淡水魚  
背中にトゲがあるトゲウオなんだ



ミナミトミヨは、今から100年以上もの昔の1914年（大正3年）に、氷上町の成松に生息していたところを中学2年生の田中弥三郎さんに初めて発見された。

この魚は、きれいで冷たい水が湧いているところにしか生息できない。正式な学名は「ブンギティウス・カイバラエ（*Pungitius kaibarae*）」で、地元では、「カツオ」とか「サバジャコ」と呼ばれていた。

背中などにトゲがあるところから、トゲウオといわれている。背中に8〜9本のトゲや、側面に一列に連なるウロコ（鱗板）がある。



体の大きさは大人で4 cm〜6 cmぐらいの小魚で、一生を真水で過ごす淡水魚である。

標本は「青垣いきものふれあいの里」の他、京都水族館や琵琶湖博物館にも展示されている。

産卵が特徴的で、雄が水中の水草にピンポン玉ぐらいの大きな巣を作り、完成したら雌を巣の中に招待し、雌が気に入ると巣の中で産卵をする。雄より雌の体の方が大きく、巣作りは大変かもしれない。

その後は、雄が敵から卵を守りながら育てる。



巣の様子

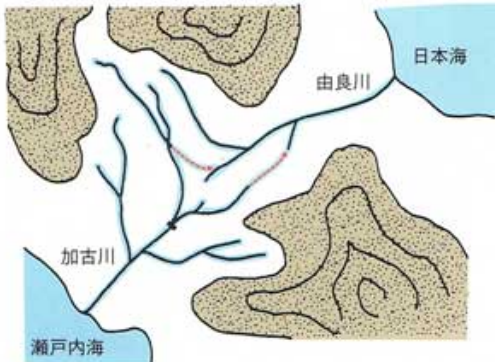


出典：トゲウオ、出会いのエソロジー  
森誠一 著参照



トミヨの仲間は、日本海側に生息していることが多いが、ムサシトミヨとミナミトミヨだけが太平洋側に注ぐ加古川水系に生息していた。

「日本海側の由良川水系からやって来て、加古川上流部に閉じ込められたのでは？」とか「大地の変動と低水温という生息条件によって生息地を限定され、最後に成松付近の湧き水に限って生き残ったのでは？」とか考えられている。



参考：雑学丹波「水上回廊」 関田青 著



丹波市は標高が低いので北と南に行きやすかったんだ！

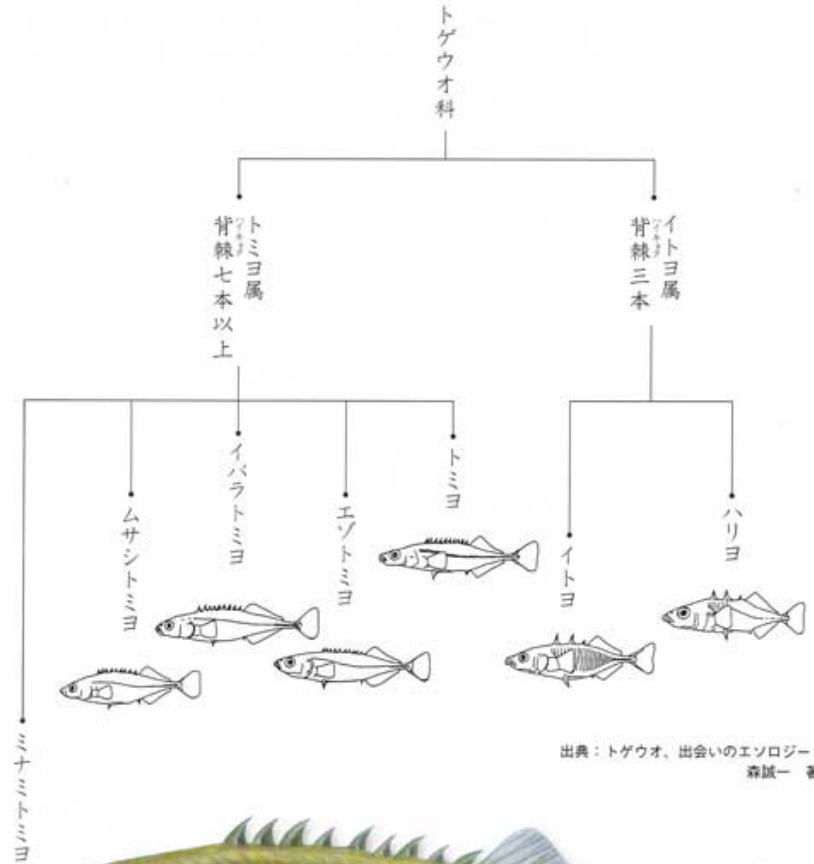


資料提供：丹波市教育委員会

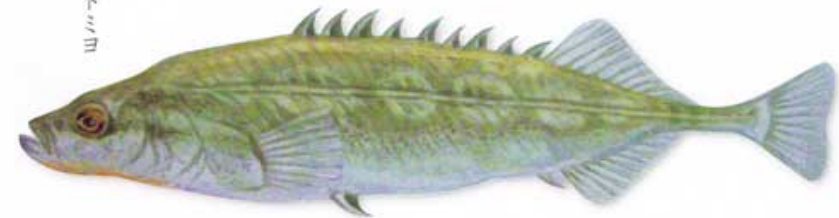
現在、日本で生息が確認されているトゲウオの仲間は、イトヨ属の「ハリヨ」「イトヨ」「ニホンイトヨ」と、トミヨ属の「トミヨ」「ムサシトミヨ」「エソトミヨ」「イバラトミヨ」などがある。

多くが一年中、水温が17℃以下の湧き水を中心に生息する。

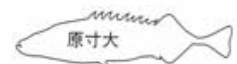
トミヨの生息地の中で、日本の一番南の端に生息していたから「ミナミトミヨ」と命名された。



出典：トゲウオ、出会いのエソロジー 森誠一 著



ミナミトミヨ細密画 【学名】ブンギティウス・カイバラエ (*Pungitius KaiBarae*)  
出典：雑学丹波「水上回廊」 イラスト：橋本龍三郎氏「青垣いきものふれあいの里」収蔵





発見されて20年後ぐらいには、姿を見かけることがなくなった。学者により生息確認作業が行われたものの発見されず、1954年（昭和29年）には、淡水魚として初めて絶滅したと判断された。

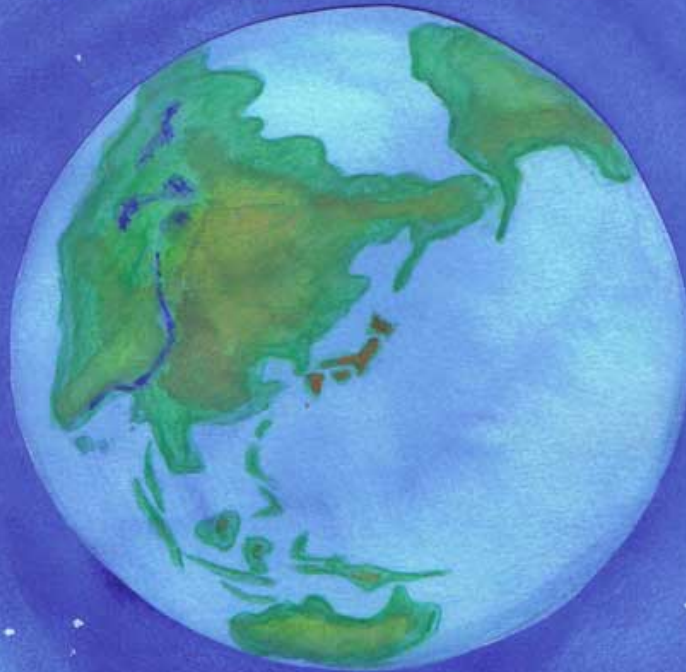
なぜ、発見されてからたったの40年間で、絶滅種第一号になったのだろうか？

それは、人間が自分たちの便利さばかりを求めて、生物が生息する場所を奪ったことも理由の一つとされている。

このままいくと、ミナミトミヨだけではなく、人も住めなくなるかもしれない。だから、どうしたらこのきれいなままの自然を未来に残していけるかを考えてほしい。







きれいな湧き水が絶えず流れているところに生息していたとされる「ミナミトミヨ」

加古川水系ではもう見つからないかもしれないけれど、由良川水系だったらまだ隠れているかも……

---

発行：柏原ロータリークラブ  
監修：森 誠一(岐阜経済大学教授)  
発行日：平成28年3月  
協力：丹波市教育委員会  
足立浩基(和田小学校教諭)・植山康弘(西小学校教諭)  
藤田隆太(春日部小学校教諭)・采女謙吾(大路小学校教諭)  
イラスト：村上祐喜子

---